

発掘されたチャシは、一条の壕があり丘先式に分類できるものである。壕の一部がとぎれたかたちの『橋状遺構』が確認された。このチャシ跡に伴うものと考えられる遺物は、2か所から出土した鉄鍋の破片である。しかし、これらから詳細な時期を決めるることはできない。またこのチャシに関する伝承も明らかではない。深川市内には、地表観察によってチャシと認められるものや伝承の残るチャシが石狩川にそついくつか知られている。今回発掘されたものはこれらの遺跡との関連で理解されるべき遺構・遺物と考えられるので、「VI-4 チャシ跡について」で詳しくふれる。

石狩川の川原で礫の観察をおこない、内園2遺跡から出土した石器・剝片・破片との比較検討を行なった。

その大きさ、円磨度、黒色ないし緑色という色調などが石斧と類似している片岩の礫は、多数見られる。また、少量ではあるが石斧に使われる蛇紋岩や泥岩、砥石に使われる砂岩も認められた。出土遺物のうちで片岩の礫・石器・剝片が多数を占めていることは、本文に述べたとおりである。これらの遺物は、石斧製作に由来するものと考えられる。片岩や黒曜石の剝片・碎片の分布状態からは、石器製作活動が台地上でなされていたと見なされる。

さらに、スクレイパーに使われているものとほぼ同質の安山岩の礫も確認できた。これの多くは扁平な円礫であり、打ち剝がすと横に長い剝片が取りやすいものである。安山岩製のスクレイパーは、北海道中央部の縄文時代の遺跡で、量的には少ないがよく出土するものである。とりわけ、縄文時代晩期の遺跡に多い。南は白老町社台1遺跡・千歳市ママチ遺跡から北は鷹栖町嵐山2遺跡・富良野市無頭川遺跡などで報告されている。

北海道中央部の縄文時代の遺跡、とりわけ晩期の遺跡でよく検出される安山岩の原産地のひとつは石狩川の上流域に求められることになる。

(西田 茂)

## 2. 縄文時代晩期の土器について

当遺跡から出土した縄文時代晩期の土器の器種組成は、深鉢・浅鉢・壺・舟形土器からなり、深鉢と浅鉢が多い。また、土器の文様には縄線文をもつものと外面が縄文のみのものが多く、沈線文の施されたものは少ないという特色がある。

縄線文をもつ土器は上川・空知地方では、従来、縄文晩期後葉から続縄文時代初頭に属するものとみられてきた。これは、上川郡東川町幌倉沼遺跡で工字状沈線文の施された土器が伴出している（佐藤 1966）ことや、縄線文が大狩部式を構成する主要な文様要素のひとつとしてとらえられている（藤本 1961）（註1）ことによると思われる。しかし、千歳市美々4遺跡など美沢川流域の遺跡群で、Ta-c層の下位から縄線文を多用する土器群が出土したことを契機として、晩期中葉から後葉のものもあることが認識されるようになった（北海道教育委員会 1977・加藤 1977）。千歳市ママチ遺跡の報告書では、斜里郡斜里町内藤遺跡（金盛・村田 1981）や標津郡標津町チシネ第1遺跡（帽田 1982）の調査結果などをふまえて、これらをさらにI群とII群に分離し、I群（「縄線文土器」）を晩期中葉のものとしている（財）北海道埋蔵

文化財センター編 1983)。

当遺跡の資料は、口縁部の断面形が切り出し状になつてないことや、口唇部に刻み目のあるものが多いことから、ママチ遺跡の1類(I群)(財)北海道埋蔵文化財センター編 1987a)にほぼ相当するものと思われる(註2)。類例は、夕張郡由仁町東三川遺跡(図VI-1-1・2)(野村 1969)、深川市東納内2遺跡(図VI-1-4・5)(北海道教育庁振興部文化課編 1977)、上川郡鷹栖町嵐山2遺跡(図VI-1-8・9)(財)北海道埋蔵文化財センター編 1987b)などにみられる。東三川遺跡や東納内2遺跡では大洞C<sub>1</sub>式に相当する土器が出土している(図VI-1-3・6・7)。

縄文のみが施された深鉢や、外面が縄文のみで口唇部や口縁内面に文様をもつ浅鉢の多くは、口縁部の断面形や調整などからみて、縄線文をもつ土器に伴うものと思われる。ただし、図V-1-32、V-2-45・46のように口唇部に縄線文が施されたものはやや新しく、ママチ遺跡の2類(II群)に併行する可能性がある。

旭川市神居古潭8遺跡(図VI-1-10)(齊藤・福田・中谷 1979)、上川郡鷹栖町嵐山遺跡(図VI-1-11)(嵐山遺跡群調査会編 1968)などでは、口唇部に同心円状の撚糸圧痕文が施された土器が出土している。これらはママチ遺跡の2類(II群)に併行する資料と考えてよいだろう。この時期の主要な文様のひとつである円弧文が施された土器は、富良野市鳥沼遺跡(図VI-1-12)(杉浦編 1986)などで、断片的な資料がみられる(註3)。

当遺跡の土器に施された沈線文には口縁に平行なものと曲線的なものがあるが、このうち、平行沈線文をもつ土器は、旭川市永山4遺跡(齊藤 1985)からややまとまって出土している(図VI-1-13)。永山4遺跡ではこのほかに「沈線が組み合わさったもの」(図VI-1-14・15)、縄線文のあるもの、「縄文を中心のもの」、口縁部内面に文様のある浅鉢(図VI-2-16)、舟形土器(図VI-2-17)も出土している。「沈線が組み合わさったもの」の中には、横位連続工字文風の文様をもつもの(図VI-1-14)もみられる。また、無文地の上に沈線多重手法による文様の施された亀ヶ岡系土器の小片(図VI-2-18)も出土している。これらは、ママチ遺跡の3類(III群)~4類(IV・V群)に相当するもの(註4)であろう。ただし、器種組成の中に壺がみられない点に石狩低地帯やその縁辺の丘陵地帯とは異なった様相があらわれていると思われる。

当遺跡から出土した浅鉢のうち、図V-2-49・50は永山4遺跡の資料に類似している。深川市内では、内園岡遺跡からもこの時期の浅鉢が出土している(深川市 1977)。

一方、蛇行沈線文や弧線文などの曲線的な文様をもつ土器は、雨竜郡妹背牛町メム川遺跡(図VI-2-20・21)(高橋・野村 1972)、夕張郡栗山町鳩山遺跡第3地点(図VI-2-23)(野村 1965)、上川郡東川町幌倉沼遺跡(図VI-2-24・25)(佐藤 1966)などに例がある。メム川遺跡・鳩山遺跡第3地点では、図V-2-57のように屈曲部が無文になった舟形土器が伴っており(図VI-2-21・23)、ママチ遺跡の4類(IV・V群)にほぼ相当すると思われる。幌倉沼遺跡の舟形土器(図VI-2-24)は無文帶のないものがほとんどで、上川郡東神楽町沢田

の沢遺跡出土例(図VI-2-27)(斎藤 1981)と並んでやや新しいものといえよう。深川市一巳町コップ山麓から出土した舟形土器もこの頃などのものであろう(深川市 1977)。

メム川遺跡(図VI-2-19)や幌倉沼遺跡では、口縁に平行な縄線文の施された深鉢や弧線文を縄線で描いたものが少數出土していることは注意される。前者は縄線の数が多いことや口縁部の断面形が切り出し状になるものが多い点で晩期中葉のものとは異なっているが、在地の伝統としてとらえることができるだろう。幌倉沼遺跡では、「胴部にレンズ状の空洞が突き抜けた」異形土器の出土も報告されている(佐藤 1966)。この頃には、亀ヶ岡系土器(図VI-2-22)の搬入は非常に少なくなるようであり、亀ヶ岡系土器から影響を受けた土器も、くずれた工字文(図VI-2-26)にみられるように、地方化の度合いが強くなっている。これらの土器の編年的位置について不明確な点が多いのは、上述したことにも原因があるものと思われる。斎藤傑氏が、沢田の沢遺跡の土器を共伴する石器の組み合わせから続縄文時代初頭のものとしている(斎藤 1981)のは、注意すべきだろう。

以上、当遺跡の土器を上川・空知地方出土の土器と比較し、両地方の編年についても触れたが、資料が僅少なため、おおまかな位置づけを行い得たにすぎない。

上川地方では、続縄文時代初頭に属するものとして、富良野市鳥沼遺跡などから出土した口縁部に縄線文やボタン状貼瘤の施された土器が比定されている(工藤 1986)が、深川市内では、この時期の資料が欠落しているようである。今後の課題としては、当遺跡で出土した縄文晩期後葉の土器と宇津内Ⅱa式併行の土器との間隙をうめる土器群を検出することが求められる。

(中田裕香)

註1 大狩部遺跡では、縄線文をもつ土器と同じ層位から、ママチ遺跡の2類(Ⅱ群)にみられるような円弧文をもつ土器(G類)が出土している。同遺跡の縄線文をもつ土器がすべて同一時期のものであるかどうかについては、やや疑問が残るといえよう。

註2 ただし、図V-1-9はこれらより新しいものかもしれない。

註3 岩見沢市野々沢C遺跡から出土した土器には、羽状縄文の地に円弧文に近い文様の描かれたものがある(財)北海道埋蔵文化財センター編 1986)。

昭和61年度に調査が行われた富良野市無頭川遺跡では、縄文時代晩期から続縄文時代の土器群の出土が報告されている。A地区では、ママチ遺跡の1類(Ⅰ群)・2類(Ⅱ群)に相当するものが主体を占め、「大洞C<sub>2</sub>～A式に比定される」壺形土器もみられる。B地区では、縄文晩期前葉・続縄文初頭の土器群が出土しており、後者の中には縦走する撚糸文をもつものもある(杉浦編 1988)。

註4 これらは、従来、タンネトウL式(野村 1977)として一括されてきたが、ママチ遺跡での出土状況などからみても、細分することが可能と考えられる(鷹野 1977・財)北海道埋蔵文化財センター編 1987a)。なお、林謙作氏は、タンネトウL式を「ヌサマイ式の地方型」、緑ヶ岡式を「タンネトウL式と同一型式内の時間差を示すもの」と理解し、ママチ遺跡の2類(Ⅱ群)に相当するものもタンネトウL式としてとらえている(林 1981)。

## 引用文献

嵐山遺跡調査会編 1968 『嵐山遺跡』

加藤邦雄 1977 「第2部 土器について」(内山真澄『N 199遺跡』『札幌市文化財調査報告書』XVII、札幌市教育委員会)

金盛典夫・村田良介 1981 「第Ⅱ部 内藤遺跡」(金盛典夫・村田良介・松田美砂子『斜里町文化財調査報告I—須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書』、斜里町教育委員会)

工藤義衛 1986 「第1節 土器群をめぐる諸問題」(杉浦重信編『三の山遺跡』『富良野市文化財調査報告』第2輯、富良野市教育委員会)

齊藤傑・福岡イト子・中谷良弘 1979 『旭川市神居古潭8遺跡 西丘農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書』、旭川市教育委員会

齊藤 傑 1981 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告』、東神楽町教育委員会

齊藤 傑 1985 『永山4遺跡』(『旭川市埋蔵文化財発掘調査報告』第8集、旭川市教育委員会)

佐藤忠雄 1966 『幌倉沼の墳墓』、東川町教育委員会

杉浦重信編 1986 『鳥沼遺跡』(『富良野市文化財調査報告』第1輯、富良野市教育委員会)

杉浦重信編 1988 『無頭川遺跡』(『富良野市文化財調査報告』第4輯、富良野市教育委員会)

帽田光明 1982 『標津の豎穴V 昭和56年度標津町内遺跡分布調査報告書』、標津町教育委員会

鷹野光行 1983 「舟形土器について」(『お茶の水女子大学 人文科学紀要』第36巻)

高橋稀一・野村 崇 1972 『妹背牛町メム川遺跡』、妹背牛町・妹背牛町教育委員会

野村 崇 1965 「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」(『石器時代』第7号、石器時代文化研究会)

野村 崇 1969 「由仁町東三川遺跡」(山代 熙・野村 崇編『北海道由仁町の先史遺跡』、由仁町教育委員会)

野村 崇 1977 『長沼町幌内タンネトウ遺跡の発掘調査』、空知地方史研究協議会

林 謙作 1981 「北海道」(鈴木公雄・林 謙作編『縄文土器大成——晩期』、講談社)

深川市 1977 「第三節 深川の遺跡」『深川市史』

北海道教育委員会、1977 『美沢川流域の遺跡群I—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』

(財)北海道埋蔵文化財センター編

1983 『ママチ遺跡』(『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告』第9集)

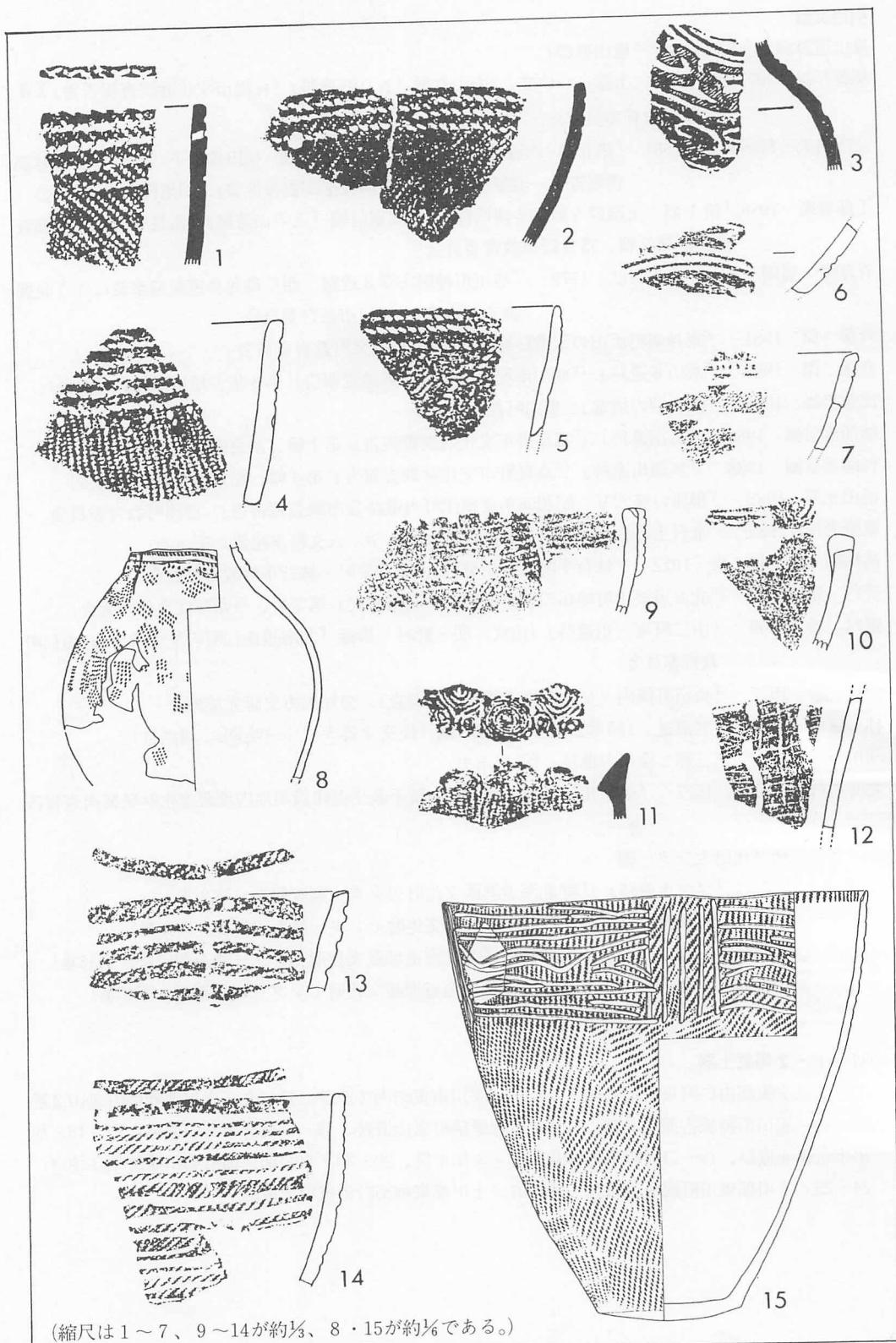
1986 『野々沢C遺跡』(『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第28集)

1987 a 『千歳市ママチ遺跡III』(『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第36集)

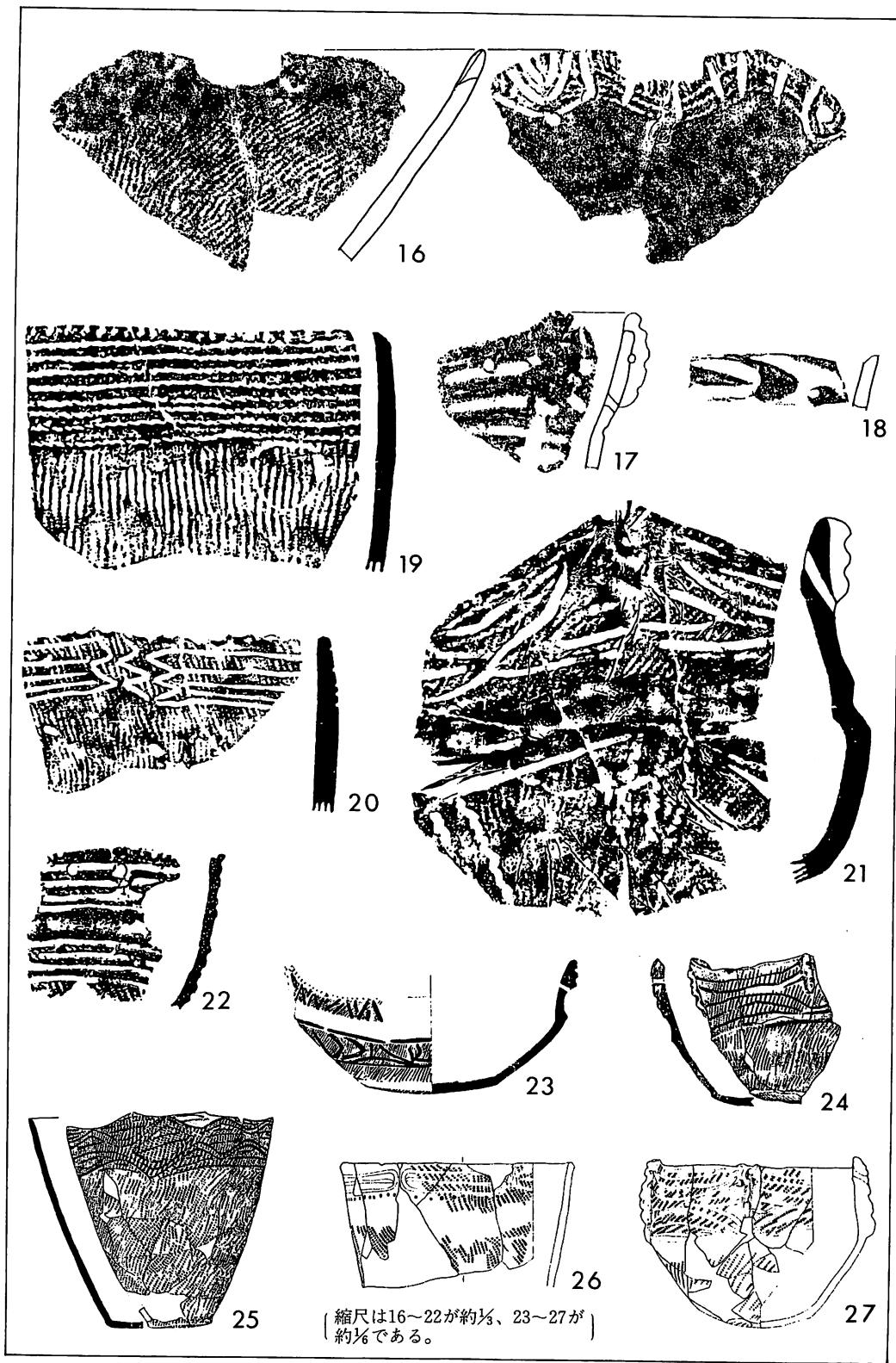
1987 b 『鷹栖町嵐山2遺跡』(『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告』第40集)

## 図VI-1・2 掲載土器

1~3/夕張郡由仁町東三川遺跡、4~7/深川市東納内2遺跡、8・9/上川郡鷹栖町嵐山2遺跡、10/旭川市神居古潭8遺跡、11/上川郡鷹栖町嵐山遺跡、12/富良野市鳥沼遺跡、13~18/旭川市永山4遺跡、19~21/雨竜郡妹背牛町メム川遺跡、22・23/夕張郡栗山町鳩山遺跡第3地点、24・25/上川郡東川町幌倉沼遺跡、26・27/上川郡東神楽町沢田の沢遺跡



図VI-1 上川・空知地方出土の縄文晩期の土器(1)



図VI-2 上川・空知地方出土の縄文晩期の土器(2)